

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成二十三年十月一日発行(毎月一回一日発行)
第十八巻第六号(通巻第二一〇号)

鈴



ぐるっけ

俳句雑誌

GLOCKE

第210号

10. 2011

香輻

品川鈴子

朝刊の粹記事となり実紫

朝顔で挨拶代はり背戸隣

妬き抛りブーケ鉄路の曼珠沙華

伊賀鉄は香輻もくせいぶら下げて



千草吊る一輛きりの伊賀電鉄
加茂堤翁も踏みし彼岸花
斑鳩の花野は川を幾潜り
ビル退^どけよ紀淡の秋の潮見台
巨船過ぎるまで噴水腰折らず
願ひ墓欠けらを貰ふ菊日和



玉鈴

大阪 谷 泰子

紫陽花の紫紺深まり寺閑か
豪邸の側溝添ひに草茂る
半日を過ごす病院さみだるる
梅雨曇り夜毎日毎に救急車
この顔にこのサンガラス大きすぎ

大阪 角谷美恵子

夏風邪の声にもキウンと電話口
軍列より砲弾のごと熱き風
夏休みしやつくりのまま塾に入る
関心は黄泉への道程茄子の馬
しみじみと冬瓜の滋養白き味

愛媛 年森 恭子

夏館女主人のシルエット
体格の相違水泳記録会
常連が座せばすぐにも冷奴
炎天にすつぽり光発電す
草を取るいづれ枯れると思ひつも

吟

兵庫 中尾 廣美

木洩れ日にえごは散りしき筵なす
朝夕に蜘蛛の巣払ふ勝手口
李ジャム煮る間に少し居眠りし
梅雨最中訪ひ来し人の肩をふく
午前三時蝉生れたらしチチと鳴く

大阪 中島 霞

川風の涼しき老舗通し土間
遠嶺に黒雲懸かり茸さはぐ
さゝれ波走る一日の葭雀
てのひらの空蝉を子が吹いてをり
涼し気に蕎麦啜りみて左利き

大阪 中島 節子

左手に虫除け右手に虫の籠
捕虫網振ればまぐれに蝉の入る
屋の虫蝉の骸のすぐ横で
蝉とりにすぐに倦きては氷菓欲る
怖々と蝉を掴みて放ちたり

大阪 中田 寿子

砂日傘犬にまかせせる荷物番
むりやりの家苞の枇杷種ばかり
へぼ茄子も野菜カレーの主役なり
目覚しの時計今日より蝉時雨
Tシャツの背にモンローの唇が

神奈川 永塚 尚代

額の花水面の影に見惚れをり
バーチャルの東海道中青田波
遠雷の近づく気配歩を速む
静まりて昼寝の親子相似形
守宮とのじゃんけんチョキで負け知らず

大阪 野口喜久子

たましいも溶け出す程の油照り
汗のシャツ脱ぐ肋骨をよじらせて
瓶くだく音炎昼の回収車
風鈴の師の句を詠みて予後待てり
鬱の字をルーベで探す梅雨曇

兵庫 蓮尾みどり

羽抜鳥すでに和毛の生え初めて
忘れたい事はすっぱり海開き
傘寿には傘寿の粋や白上布
逢魔が時卵がかえる冷蔵庫
迎えたるみたまも入りて踊りの輪

兵庫 長谷川 鮎

老長が執筆見守り菊大輪
菊香り俳諧奉納金水引
木犀の風洗顔の濡れしまま
山分けはじゃんけん決めて茸狩
真剣に漢じゃんけん茸分け

兵庫 林 哲夫

世の人に一と月遅れ更衣
梅雨晴間父のステッキさび落し
故里の味噌届きたり親爺の日
日傘より帽子がよしと大股に
梅雨明るる机上の名著借りしまゝ

兵庫 林 美智

嗚呼暑と零しつ老の友元氣
耳にするのみの我等が巴里祭
あたらしき書道教室小暑より
明礬を入れて初生りなすび漬
今年亦沼島の宿で出会ふ鱧

愛媛 福島 松子

生真面目な質は変わらず沙羅の花
大差なき自慢話や浮人形
燕生れ巢より頭の見え隠れ
百物語幼なびたりと肌を寄せ
夏霧に静もる山の美術館

愛媛 福田かよ子

内海の潮目に躍る夏の色
童謡を流すうどん屋百日紅
吊り橋の影ゆらぎいる溽暑なり
黒南風の病窓よぎり鳴く鴉
病窓を激しき雷雨叩き去り

兵庫 藤井久仁子

蚕豆にくつきりと眉ありにけり
耳朶に蚊のささめきぬ寝入り端
洋服に身八口欲し扇風機
梅雨の明蛇口の錆の青めける
水平線はるかに風の籐寝椅子

兵庫 藤田かもめ

みちのくの空に半旗と鯉のぼり
遠き日の奉安殿址草いきれ
秘話一つ千人針に蚤虱
一会せる高野聖は泥だらけ
手長猿両手届かぬ雲の峰

兵庫 史 あかり

さり気なく告げる浴衣の左前
一瞬の出遅れのあり競べ馬
貯水タンクはすでに満杯濃紫陽花
偏食の直りてキャンプより戻る
風鈴の舌を繰る路地の風

兵庫 古井公代

応へなき奥の座敷に蚊遣の香
公園の子等をからかふ時差噴水
梅雨じめりインコが真似る舌鼓
陋屋に物音かしこ台風来
毛刈り犬天花粉の香まきちらす

大阪 古林田鶴子

冷やつこあれば幸せ一人膳
「ごめんね」と蜘蛛の囲破る裏の木戸
五月闇しかと味はふ節電時
親しめるクールビズあり役場にも
新玉ねぎ軒下賑はふ裾分けに

香川 細川 知子

昼寝覚地球半周してゐたり
まつさきに犬出迎へり夏の宿
外人と間違へられし夏帽子
鉄線の蔓がささへし水車小屋
ばら生ける花瓶抱へて旅もどる

兵庫 細野恵久

ジャズメンはむかし青年秋高し
鯉飛んで男やうやく立上る
どの木の実いづれの樹よりとて見上げ
鹿鳴けりさつき聞きたるより遠く
新米のぬくもりあるを貰ひけり

鈴の奏

品川鈴子選

老鶯を聞く陸奥の國境 兵庫 鈴木 愛子

蟬穴の深淵幾多朝の庭

夏の雲流れ来隠す佛母寺

鳴きもせで口あけるのみ夏の猫

見上げては滝の長さを測りけり 兵庫 有本 勝

仏堂の蠟燭揺らす若葉風

街道のはづれの寺の青葉闇

おいお前仲よきころの心太 兵庫 的場うめ子

次の日は分らぬ三婆暑氣払ひ

暑さにも鈍しと云はれこの猛暑

海開き出来ない海を空が見る

はづしたる義足も汗の匂ひする

栄転の挨拶届く梅雨晴間 東京 遠藤とも子

炎昼の敷石オムレッツ焼けそうな

涼しさをしあはせと思ふ昨日今日

黒か白か日傘売場に幾たびも

偲ぶ会涙を流し梅雨明け 東京 樋口 正輝

空を行く雲に乗りたや地の熱さ

熱中症鳥は元気に飛びまわり

酔い痴れて独りとぼとぼ夏の月

涼風に夢みるみどり児の寢息 兵庫 上田 雪夫

訪ね来る人おらねども水を打つ

夏祭り年に一度は会へる友

裏切りをそのかしたる花火の夜

福島の人に牛にも永き夏 兵庫 市橋 香

初蝉や仮設の中に喫茶室

土用太郎刺身の鮪目を奪ふ

盆踊り三尺帯の絹に染み

漆黒の明珍風鈴句座の顔 兵庫 磯田せい子

玻璃越に守宮の足をくすぐる子

着せ替えの姉さま人形立葵

七夕竹揃う切口軽トラック

梅雨寒や辛めのカレー子を待てり 兵庫 武田 貞子

風薫る佛足石にそつと乗る

秀 鈴 記

巻頭 三句 品川 鈴子 評
四句〜十五句 向江 醇子 //

*選句は全て 品川鈴子

鳴きもせで口あけるのみ夏の猫 鈴木 愛子

はづしたる義足も汗の匂ひする 的場うめ子

ペットのうちでも犬猫のように全身が毛皮で包まれていては、夏場はさぞ暑かるう。しかも人や子供に撫でたり抱かれたり、その体温も加わると愛されるのも一苦勞。そこで風筋を旨く見つけてこっそり昼寝と決め込む。だがそれが叶わぬ炎昼など、何をすることも億劫で鳴くのもしんどい。掠声を振絞る気も無く口だけ開ければ飼主には解る。

義足に頼って外出するのは、リハビリや治療の通院でしようか。
痛む足が汗ばみながら一歩ずつ義足に馴染むだけでも、可成り辛抱を重ねてのこと。そのうえに道は猛暑の照り返し、ご苦勞のほどは察するに余りある。外した義足の裡側には、汗の匂いが滲み込んでいる。いつも苦勞を共にする自分の分身で、努力の甲斐があるようにと支えてくれるいとし義足。

おいお前仲よきころの心太 有本 勝

炎昼の敷石オムレッツ焼けそうな 遠藤とも子

身内とか幼い頃からの付き合いで、極く気心の通じる仲間なら、顔をみれば氣樂に誘いあって心太を食べたくなる。それも言葉に成らない五音の「おいお前」だけで通じ、庶民的な息抜きが出来た頃を思い出す。そんな仲間が減るご時世なのだろうか。

暑い白昼の敷石から連想した発想の面白い一句である。子供が描いたクレヨン画の一枚を見るような、ジュウジュウと熱い音迄聞こえてきそう。

酔い痴れて独りとぼとぼ夏の月

樋口 正輝

玻璃越に守宮の足をくすぐる子

磯田せい子

作者は同じ東京ぐるっけのお仲間なので、お一人で生活をなさっていられる事を存じ上げているから、尚こんな場面もあるうかと、その心情を察してしまふ。帰宅しても誰も待つ人も居ない家までせめて夏の月を連れて帰ろう。

訪ね来る人おらねども水を打つ

上田 雪夫

汗ふきふき飛び乗る男ドア閉まる

武田 貞子

打ち水をして、今日という日の終わりを心静かに迎える。誠実な日常生活を垣間見る作者の手柄の忍ばれる一句。

こんな経験を誰しも見たり、又体験したりすることもあるであろう。男のホツとした顔、間の悪さ、汗が又ドツと吹き出てくる。

初蟬や仮設の中に喫茶室

市橋 香

予想せぬほどに浴衣の着丈伸び

濱田ヒチエ

大地震、大津波から五ヶ月余。仮設住宅の中にも人々が憩える場所が出来、顔見知りの誰彼が集う。これからもまだまだ大変なことが山積であり、心の重さも晴れてはしまわないけれど、一時の安らぎ。蟬の声を聞くゆとりも。

去年の浴衣は少し短め目かな。丈を伸ばしてあげようと思つて、「一寸着てみて」と着せてみたらその成長ぶりに驚く、嬉しい悲鳴と云ったところでしょうか。本当に伸び盛りの子は一年とは云えず、毎日伸びているのではないかと思つてしまふ。